



1\_昨年12月16日、5・6年生を対象に催された「しめ縄づくり」の体験授業。ミーティングルームで早坂校長が見守る中、ひとりひとりていねいに作り方を教える高砂会のメンバー 2\_3月17日に行われる卒業式に向け、全員で歌う合唱曲の練習に真剣に取り組む斎川小の子どもたち

### 斎川小学校の子どもたち

斎川小は、平成27年度まで複式学級で授業を行っていた。複式学級では、一つの教室の正面と側面に黒板を置いて授業を進める。始業のあいさつの後、子どもたちはそれぞれの学年の黒板の方へ机を向ける。音楽や体育の授業であれば2学年を一緒に行うこともできるが、国語や算数などの主要4教科は各学年毎の内容をその学年に教えなければならぬため、教師は「わたり」という方法で授業を進める。例えば教師が一方の学年に課題を出し、それに取り組みさせている間は、別の学年を指導するという授業方法である。

斎川小の早坂雪男校長は「一つの教室の中で2学年の授業を同時に進めなければならぬので、授業を組み立てるための工夫が必要になります。担当する教師は苦労すると思います。一方で子どもたちもそういう環境の中でより集中力を必要とされる部分はあったと思います」と話す。本年度は統合へ向けた教師の増員があり複式学級は解消された。

また、子どもたちと教師との関係について「ほかの学校よりも子どもたちと教師との距離感が近く、教師を身近な存在に感じている」と話す。昨年5月8日、斎川まちづくり協議会が、「斎川地域活性化プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは、各地でまちづくりの支援を行っている有限会社「プランニング開」の支援を受けて実施。12月まで計5回のワークショップを開催し、斎川地区を活性化するための話し合いが行われた。

### 動き出す まちづくり協議会

同協議会の成澤一男会長は「斎川小がなくなってしまうことで、地域全体が元気を失ってしまうのではないかとという不安がありました。そのため多くの地域住民と一緒にこれからの斎川を考えていかなければならないと思いました」とプロジェクト立ち上げの動機を話す。ワークショップの講師を務めた松村弘美さんは「この集まりに、毎回30人以上の人が参加してくれる。回を重ねても人数が減らないのは斎川の強み。どうせやるならみんなでおもしろがってやること。大切なのは『やれる、やれる』という楽観性だ」と参加者を後押し。毎回グループに分かれて話し合い、誰を呼ぶか、いつやるか、ネーミングは？ 費用は？ といったことを熱心に、そして楽しそうに話

じているでしょう。あまり近すぎて緊張感が欠けてしまう時もある。気持のいいあいさつや正しい言葉遣いで接するなど教師の側も気を配っています」と小規模校の一面に触れた。現在4年生以下の子どもたちは、平成30年度から全校児童600人を超える白二小へと環境が一変する。昨年4月の始業式で、早坂校長が統合について話したとき、不安な顔をすく子どももいたという。早坂校長は「日々の学習や生活をきちんとやっていたら、勉強の面でも運動の面でも力が付いていくのだから、どこに行っても心配はいらないよ」と不安な子どもたちを励ました。

こうした中、安心して新しい学校生活を迎えられるよう、両校では統合に向けた交流が始まった。昨年9月13日、初めての交流会が白二小を会場に開催。初めに体育館で対面式が行われ、白二小の全校児童を前に、斎川小全員が整列し、代表の6年生があいさつ。その後、各学年に分かれクラスで白二小の子どもたちが企画したお楽しみ会などで交流を深めた。

「初めての交流に緊張の様子でしたが、帰ってきた子どもたちからは、『楽しかった』『次は一緒に体育をしてみたい』という声が続いてきました。この交流をきっかけに、子どもたちが統合への不安感がかなり薄まったように見えます」と早坂校長は子どもたちの変化を話す。来年度はこの交流活動をさらに進めて、授業にも参加したり、野外活動なども一緒に行ったりする予定。また、白二小の児童が斎川地区を訪問して交流を行うことも計画中である。

斎川小は、平成3年に現在の校舎に建て替えられた。新校舎の特色は、子どもたちだけでなく地域住民の生涯学習の場として活用できる「ミーティングルーム」を設置したこと。このミーティングルームが斎川小と地域住民との「交流の場」として長年活用されてきた。早坂校長は「この学校は、ミーティングルームを使って、地域の伝統を学ぶ活動を授業に積極的に取り込んできました。学校はなくなるかもしれませんが、統合しても斎川の子どものちであることは間違いのないので、公民館やまちづくり協議会で行事を企画して子どもたちを集めることはできると思います。これまでどおり地域で子どもを育てていくことに変わりはないでしょう」と地域とのつながりが続いていくことに期待を寄せた。

「初めての交流に緊張の様子でしたが、帰ってきた子どもたちからは、『楽しかった』『次は一緒に体育をしてみたい』という声が続いてきました。この交流をきっかけに、子どもたちが統合への不安感がかなり薄まったように見えます」と早坂校長は子どもたちの変化を話す。来年度はこの交流活動をさらに進めて、授業にも参加したり、野外活動なども一緒に行ったりする予定。また、白二小の児童が斎川地区を訪問して交流を行うことも計画中である。

### 統合に向けた話し合いが進む

両校の統合を円滑に進めるため、昨年6月、両学区の保護者、地域住民、教職員、教育委員会職員で構成する「白石第二・斎川小学校統合準備委員会」が発足した。同委員会には教育環境部会と総務部会の2つの専門部会が設けられ、個別の項目について具体的な調査や調整を行っている。教育環境部会では「スクールバスの運行」「学校行事や

学級編制」「交流活動」などの項目について、総務部会では「施設や備品の調整」「児童会やPTAの組織」などの項目を検討。一方で、斎川まちづくり協議会が学校統合について地域住民へアンケート調査を実施。記念碑の建立や閉校式、統合後の校舎の活用方法などについて結果を集約している。今後はこれらの結果も踏まえながら、統合への準備が進んでいく。同委員会の委員で斎川小学校PTA会長の高橋省吾さんは「子どもたちが統合後の学校に馴染めるかどうか心配はありますが、一番望むことは、子どもたちがストレスなく笑顔で新しい学校に移れることです。子どもたちは順応性が高いので、友達が増えるという期待もあるようです。通学や学習の面などこれから話し合うことはありますが、子どもたちの将来を見据えればプラスになるととらえたいです」と未来に目を向ける。

### 子どもたちの変わらない笑顔が、これからも地域に元気を与える ~斎川小学校の子どもたちからのメッセージ~



白二小のみんなへ

地域の方々へ

3\_昨年9月13日、初めて行った斎川小と白二小の交流会。白二小体育館で全校児童を前に堂々とあいさつをする斎川小の6年生 4\_昨年11月22日に全校児童を対象に催された「親子ころ柿づくり教室」で手際よく柿の皮をむいていく子どもたち

